

企画のこ と ば

心窩部を深く圧迫すると患者が軽い痛みを訴える——あまりに多く遭遇するその場面で、カルテには何と記載しているだろうか。「有意な圧痛はない」と記載しているだろうか、それとも「心窩部に軽度の圧痛あり」としているだろうか、いずれにしろ、その後には「有意な圧痛とは何か」もしくは「軽度の圧痛が何を示唆しているのか」という疑問が続かなくてはならないはずである。その疑問をもとに成書を紐解くと、正常な大動脈は深く触診した際に筋緊張や反跳痛を伴わない鈍い不快感として圧痛が生じることがある（同様の圧痛は腫大した肝臓、正常の盲腸、正常または攣縮したS状結腸でも生じる）ことを知る¹⁾。こうした過程を経験したことがないのであれば、普段行っている評価は漠然とした、解像度の低いものかもしれない。さらに、このような疑問を抱かないことは、腎臓の触診で軽い痛みを生じる患者に対しても、先ほど同様に「有意な圧痛ではない」と誤って結論づける可能性を孕んでいる。

医師として、常に疑問をもち、理論と実践を行き来して自己研鑽できることが理想であろう。しかしながら、日々の診療でこういった素朴な疑問に行き当たることは意外に困難でもある。そこでわれわれは、自身のためにも“教える”という選択肢をもつことができる。初学者の素朴な質問や振る舞いは指導者の苦い経験を呼び起こし、謙虚さを思い出させる。指導者は自身の感覚を言語化することで感覚がより鮮明となり、漠然と行っていた日々の診療に再度問いを投げかけることとなる。われわれは学習者という鏡を覗き込み、自身の診療を見つめ直す。教えることは見直すことなのだ。だからこそ、自身が完成していないことを理由に指導を放棄してはならない。そして、未熟な学習者の上達に期待することを忘れてはならない。ともに成長するために、見直し、教えることを繰り返すのである。

その積み重ねの先に至った達人の身体診察は洗練されており、さりげない。たとえば画家ホイッスラーが1877年に描いた『ノクターン』という絵には逸話がある²⁾。ホイッスラーは、2日間で描いたこの絵に非常に高額な値段をつけた。ある批評家がこの値段に対して非難し、結果として裁判となっている。法廷で「たった2日間だけの仕事」に対して途方もない額であることを追求されたホイッスラーはこう答えた。「とんでもない、生涯をかけた仕事で得た知識に対してですよ」。達人の身体診察は短時間で完遂するが、その背後には生涯をかけた積み重ねがある。その貴重な技術は失われる前に伝えなければならない。個々が生涯に診療で

きる患者は限られているが、もっている技術を後続に伝えることで、その恩恵を受ける患者は確実に増やせるはずだ。

今回、真摯に身体診察と向き合う達人たちに卓越した技術を記していただいた。限られた誌面ではその片鱗しか伝えることはできないが、読者に見直すこと、教えることの本質を気づかせてくれるだろう。私を含めた学習者に向けて、その本質に肉薄する原稿を書いていたご執筆の先生方に心から謝辞を申し上げたい。

2023 年 11 月

伊原崇晃

(兵庫県立尼崎総合医療センター小児科)

文献

- 1) Bickley L et al : Bates' Guide to Physical Examination and History-Taking, 9th ed. Lippincott Williams & Wilkins, 2007
- 2) Chu P : Nineteenth-Century European Art. Pearson College Div, 2002

WEB アンケートにご協力ください

読者アンケート（所要時間約 3 分）にご協力いただいた方の中から抽選で毎月 10 名の方に図書カード 1,000 円分を贈呈いたします（当選者の発表は贈呈品の発送をもって代えさせていただきます）。

アンケート回答はこちらから ➡ <https://forms.gle/RZMT6aqQoFoAKdJu8>

